
夏の日 オキナワで

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の日 オキナワで

【Nコード】

N 8 6 4 7 A

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

沖縄にやってきた探偵団。一行は戦時中に悲劇が起きたアブリラガマに入る。しかし、そこで哀が倒れてしまった。

一応この話はコ哀です。

8月のある日、少年探偵団は夏真っ盛りの沖縄にやってきていた。阿笠博士が懸賞で航空券とホテルの宿泊券を当てたからである。3泊4日の日程で、探偵団の3人は青い空の下での海水浴を楽しんだ。ただ、この日は違った。「遊んでいるばかりではいかんぞ。」の博士の言葉の下、この日はお勉強の日となっていた。

沖縄と言えば平和学習。というわけで、この日は朝からレンタカーを借り、平和記念館、ひめゆりの塔等を見て回っていた。さすがに、高校生であるコナンは一応知識として沖縄戦の概要は分かっていた。しかし、全く分からなかった少年探偵団の3人には相当な衝撃を与えたいらしい。特に、歩美はひめゆりの塔で泣き出してしまったくらいである。もっとも、コナンも自分より若い少女達が数百人という単位で死んだ事実を見つめ、改めて今の平和を考えたのであった。

そして、一行は最後にアブチラガマにやって来た。

アブチラガマとは、沖縄戦の最中は系数豪と呼ばれた、全長が2

70mもある大きなガマだ。このガマは、現在こそ2ヶ所しか出入り口がないが、当時は複数の入り口や空気取り入れ口があり、そして負傷兵の救護所として使用されたが後に放棄、多くの負傷者が置き去りにされた。さらにその後民間人と軍人が同時に使用したため、悲劇が起きてしまう。

少年探偵団は語り部さんの誘導の下、時計のライトを点け中に入った。

中は急で、しかも自然洞窟のため足元は悪い。途中で石積みを通り過ぎた。当時兵隊達が手榴弾の爆風よけに作ったものである。そして、最初の行き止まりである。そこにはくぼみがあるが、かつては死体やまだ息があるものの治療不能とされた重傷者が捨てられた場所だと言う。

ガマに入った時から、小学生の3人は震えつ放しであった。今まで幾度も洞窟には入っていたが、さすがに何百人単位で死んだと言われる場所では怖がらざるえない。

一行はさらに奥に進んだ。そしてとても広い場所に出た。

「ここにはかつて多くの負傷者が収容されていました。しかし、ここで黄燐弾が炸裂し、多くの人が吹き飛びました。中にはあそこの井戸まで飛ばされた人もいました。」

全員が見ると、たしかに数m離れたところに、ぼっかり井戸がある。しかしそこは高低差があり、数m落ちた事になる。

「ひどい。」

歩美がぼつりとつぶやく。

「そうね、ひどいわね。けどあそこに飛ばされた人は井戸の水を飲んで、最後まであきらめなかったの。そして生き残ったのよ。」

「すげえ！」

「よく助かりましたね。」

語り部さんの言葉に、源太と光彦が感嘆の声を上げる。その時
バタ

誰かが倒れた。コナンが明かりを照らすと、哀であった。

「おい、灰原!!」

直ぐにかけよる。息が荒い。過呼吸だ。

「過呼吸だな。俺が外に連れてくよ。」

「じゃあ、わしらも。」

「いや、俺一人で大丈夫だよ。それに皆はちゃんと勉強しておいた方がいいぜ。」

と、一人哀を担いで出口に向かった。しかし、不安定な足元、しかも高低差が大きい。次第に苦しくなってきた。

「くそ、苦しくなってきたぜ。」

「工藤君。」

「おう、大丈夫か灰原?」

「ええ、大分良くなったわ。降ろして、ちょっと休んだら。」

「え!?! いいのか。」

「ええ。」

哀の申し出を受け、コナンは彼女を下ろし、小休止する。

「工藤君。」

「何だ?」

「実はね、さっきガス室でのことを思い出したの。」

「ガス室って、お前が脱出した。」

「ええ。実はね、あの時私怖かったの。死ぬ事だけじゃないわ。自分は一体何者なのか、ただ組織にいいように操られていた虚構の人形じゃないかって。」

コナンはなぜ哀が過呼吸に陥ってしまったかわかった。恐らく、このガマが多く死者を出したと言う事が、彼女の暗い過去を呼び覚ましてしまったのであろう。それに、語り部さんはこうも言っていた。

「軍はここを去るとき、動けなかったり、運んでいけない兵士に青酸カリ入りのミルクを配って毒殺したの。むごい事よね。お国のためと言われて連れてこられた拳銃、用済みになったら殺されてしまったんです。」

この言葉に共感したからかもしれない。

「そうか。ま、取り敢えずいったん外に出ようぜ。」

コナンは外に出ることを提案した。ここにいっても哀の暗い過去を呼び覚ますだけと思ったからだ。

「ええ。」

そして、二人は歩き出した。しばらくして、急な階段が現れた。そこを上ると、出口であった。視界が急に明るくなる。そこは、入り口から二百m程離れたサトウキビ畑の片隅であった。

「ざわわ、ざわわ、ざわわ、この悲しみは、きえない。」

哀がサトウキビ畑の最後の歌詞を口ずさんだ。その歌い方は悲壮感で一杯だった。そんな哀を、コナンは見かねたようだ。

「なあ灰原。」

「何？」

「お前は今をどう思っているんだ？」

「え！？」

「確かに、お前は組織の操り人形だったかも知れねえけど、今は違うだろ。確かに完全に終わったわけじゃねえけど、今は自由で、自分のやりたい事を出来るだろ。だったら今を精一杯生きなくちゃ。さつき語り部さんが言ってただろ。最後まで希望を捨てずに努力して生き残った人もいたって。だったらおめえもがんばれよ。それに、過去の悲しみは消えなくてもそれ乗り越える事は出来るんじゃないか。」

「工藤君。」

「それに、何度も言っただろ。俺がお前を護ってやるって。それは組織だけじゃねえぜ。お前を苦しめる全ての物からって意味だぜ。」

コナンのその言葉に、哀の顔はほんのりと赤くなった。

「ありがとう。」

哀言葉に、今度はコナンが赤くなった。

「あ、いや別に礼なんか。」

コナンがそう言った時だった。

「ああ！！コナン君と哀ちゃんが赤くなってる！！」

「「えー！！」」

二人を見ると、博士達が既に出てきていた。

「二人とも、何をやっていたんですか！！」

光彦が鋭く切り込む。

「別になんでもねえよ。」

「そう、ちょっと工藤君に励まされただけよ。」

そう言っで、二人は笑うだけであった。

おわり

（後書き）

作中で使ったさとうきび畑のざわわとは、作詞した寺島さんが、
沖縄のさとうきび畑で聞いた、戦没者の悲鳴や嗚咽を表現するのに
1年かけて作ったものです。

今回は自分の研究旅行体験を盛り込みました。評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8647a/>

夏の日 オキナワで

2010年10月20日19時29分発行